

インターバンクの声（2014年9月16日）

先週の金曜日に発表された8月の米小売売上高や9月のミシガン大学消費者信頼感がともに堅調な結果となり、長期の米国債利回りも上昇となった。ところが、米連邦公開市場委員会（FOMC）の16-17日開催が近いとあつてか、ドル円は107円台、ユーロ・ドルも1.29ドル台から離脱するような値動きとはならなかった。そうした相場展開の中、東京市場が休場の昨日は、豪ドル相場がアジア時間に限られたものの半年ぶりに0.90ドル台を下回り、新たなレンジ相場に入り込むのかどうか微妙な局面を迎えている。ただ、今回の豪ドルの値下がりが、8日から僅か一週間ばかりで400ポイントとなっていることから、昨日の0.90ドル割れで一旦は下げ相場がひと段落する可能性もある。それを確認するのに格好の材料ともなる前回のRBA理事会の議事要旨の発表が今日あるが、それが済めば、明日はいよいよ市場の利上げ観測が再び冷めるのかヒートアップするかで全く違った相場展開になる米FOMCだ。

提供：SBI リクイディティ・マーケット株式会社

お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。

本レポートに表示されている事項は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。